生花早満奈飛　四編　全

生花早學四編序

夫栽朝にハ年の始を祝し。松と竹との操を立て常盤葉を折揃へ。貴きも賤きも和睦の禮義を勧む然れバ物として教にならざるハ支るく。事として忠孝の道離るゝ支ふことハ形として禮義を備へざるハなし。されバ人ゝ花を翫ぶに其意によらバ自ら勧善懲悪の基となり三教五倫の道に

かなふべし。予此小冊を閲するに。陰陽和合の理を諭し。草木出生の考を委しく著せり。故に衆人是を熟覧せば。生花の道を學ぶ而已ならず天地の恵の廣大なるを知りて萬物の道理を明むべしと書の有益なるを始めに告るものなり

天保十四年癸卯中秋

荒陵

純浄庵誌

生花早満奈飛四編目録

南性の梅の圖

○南性の梅ハ筒又ハ置花器ニ挿てよし

○此梅陽氣を主る梅なり故ニ咲こつる所を挿る花満れバ散こと近し是を陽中の陰の毒といふ

此花ハ上座床ニ直すべし是則ち右旋の生方也

是を女書といふ

北性の梅の圖

○北性の梅ハ陰中の陽なり花をまばらに開くんと欲する所を生る体の枝ニ満開をつるひ用と留との枝ニ蕾をつるふ

尤古木とし閑情ニ挿べし

此花ハ則ち下座床ニ生べし

是ハ左旋の生方之

〇南性の梅ハ陽氣をつくさゞる梅なる故に咲かゝる所に生る
されバ用の枝に満開をつかひ体の枝に半開を用ひ留に蕾を
遣ふべし 尤古木にしたく体用ハ一本にて備ふべし 且又女蘿を
備へ氣條を三本体にそへて遣ふべし 都合五本なり
但し 若木にハ女蘿氣條等をあしらふ事を禁ず 是則
若木に氣條を用ゆる時ハ梅の性をやぶる[illegible]べし
古木に氣條をあしらふハ其性をたつとむ理なり女蘿
も又氣條に准ずべし 女蘿のとり様ハ圖にてのぶるに如し
尤此梅ハ正月に生るが順なり
右養ひかたハ蒼澤山ある所を用ひ白蜜をあさくめて和に

解きて筆にて蕾にぬるべし 則ち蕾ハ留なり又体の半開
へも是を塗べし 用の蕾へハぬるべからず 寒中なれバ室にて咲
すべし 春なれバ座敷を立こめて火鉢に火をよくいけて
置べし 篤と養ひて後花に挿べし
〇此性の梅ハ陰中の陽の梅なり花ひらかんと欲する所を入る
故に体の枝に満開をつかひ用の枝と留のゑだに蕾をつかふ
此梅古木にして随分閑情に挿べし 蕾ハ陰にして
内に陽氣を含む故に陰中の陽なり女蘿氣條ハ南
性の生方に准ずべし 南性北性の梅ハ陰陽の梅にて阿
吽両氣の挿方と心得べし 南性ハ右旋に入て上座床に直るを

生べし　此性の梅ハ左旋に挿て下座床に直なり尤北
性ハ冬分より初春まで生べし
○臥龍の梅ハ廣口馬盥のるいに挿べし　此梅の出生ハ大木
となりて枝土に進む勢ひあり則ち土に枝つきたるところ
より根をさし夫より又大木となりて多くの枝土に
進て下りたる勢ひ龍の臥たるが如きを以て名とし
梅の枝水をくぐりたる所を以て土につきたる形容をなし
なり故に自然と曲ある枝を見たてておきて挿べし　悪
ためさるハ臥竜にあらず　此梅ハ鱗の格をそなへて梅の
本性をもとづき挿べし

○臥龍梅の圖

○臥龍の梅ハ自ら曲りたる枝を
愛して挿たるハ至極の花とのぶべし
氣條のつかひ方ハ古木の後へ入べし
足枝の地をさるものハ伐べし
足枝といふハ臥竜の幹より
眞ハ直に出て
左右へ長短に
踏出したる
枝を言なり

廣口の類向ふの隅より手前の角へ枝先を出るやうに挿べし
尤も枝ハ捻り曲たる形を水中に浸し末の方ハ作意を以て
存分に生べし但し水潜し所より凡半に体を置べし水
潜りより先へ出たる所ハ又一瓶の花と心得てよし則ち一瓶
にして二瓶の花を愛する心にて取行ふべし氣條ハ長短
五本根より出て女晝ハ水潜の枝より離れてつかふ花留ハ大抵
砕き書にて留るなり書留なれバ床を禁て臺目に下て置べし
足枝つかひ様ハ幹より左右へ長短に容よくつかふべし
此梅を挿んと欲バ冬ハ風なく葉なき時よく枝を見立おきて
而して生べし無理になめたるハ風情なし

○縮柳挿方

縮柳ハ掛花器に挿てよし枝ハ細くして長く延たる枝を三
枝よせて結ぶべし尤枝先ハ九本十一本但し十七本まで
分れたる所を挿べし縮き柳ハ結ぶべからず縮柳ハ長くのび
たる所の性を尊んで結ぶといへり三本を一によせて結上
輪になりたる所是三より一に納る形なり輪の圓ハ三寸又六分に
すべし此三六ハ一年の日數又三百六十度に比て圓き所ハ天
文にして赤道又佛家にて倶舎論におゐて須弥山日月の廻る
ところ則三百六十度となり三枝ハ天地人の三才にして昇る枝ハ清
降る枝ハ濁ると知べし 則ち下りたる枝ハ空にして直なるを

以て是とし随分善悪によらず軽く直なる所を挿べし一輪の本にして柳の平しき本性をいれ枝の末にして柳の性を入べし柳ハ強き勢なきを吉とし然れども勢ひいさゝかも無ハ又死枝なれバ禁ず強からずしてやさしく勢ひあるを専とす但し柳の枝を撓るにハ火にて撓もよし又焼泥鏝にてためるも可なり

縮柳の圖

此輪の径 三寸六分

此圖ハ上座床の生方之

縮柳にハ椿を會釈に挿べし二重切に挿る時ハ上に柳下に白玉椿を挿べし白玉なき時ハ色の椿にても苦しからず又椿の葉七枚つかふ時ハ日裏を一枚まぜて挿べし日裏なき時ハ活物ならず天の應ずる所ハ陽氣ハ昇る性にして六つにて終るなり陰氣ハ降る勢にして是又六にて終る之昇ると降るを此勢十二にして則ち十二氣なり人にたとへバ六十一歳を本卦がへりと言が如し又椿の花ハ一輪に葉三枚入るを以て椿の生方とす縮柳の會釈にいれる時ハ花二輪に葉七枚つかふべし又二重切のかり猿のたぐひ竹の太き花器ハ椿の花三輪 葉九枚つかふべし尤九まいの内日うらを一枚

つらぬ此九枚ハ八ツに満て九ツに終る所なり則ち子の九より
午の九までに陰分の陽分にかゝる時節にかなふ所なり故に
九枚の中に一枚日裏をつかふと心得べし右三輪の時ハ半開の花て
撓葉花押への葉をそへて是に蕾を加へ都合三輪とし又
釣舟にいれる時ハ柳の根に椿を挿べし但し三輪の時ハ
満開なりとも通ふべし其時ハ花の匂ひの中へ生塩をすこし差
おくべし則ち右養ひ方并に撓葉花押の葉の事又ハ第二
編に詳らかなれバ是を略す

○蜀柳を舟に挿る時ハ櫓花に入て舟の底より上て横に
の格を定め夫より下りさる枝ハ上り下りをを通ふなり

舟の生方一式ハ既に二篇に委しく著ハせバ爰に略す
又獅子口などに挿るときハ獅子口の手より上まで鱗の格を
定め夫より下りさる枝ハ種〻曲ありて苦しからず二なん
何れバ一本ハ下る枝をつかふべし
柳の外ハ凡て椿水仙寒菊の類よし

○萬年青の養ひハ四季に應ずる所春秋ハ三四日水を干すべし
夏ハ二三日冬ハ四五日陰干にかりして組上もつとも組上の
節一まいく爪にて能くきざみて紙捻の如く細く捻りて
て組上べし組て後花器に進て花くばりをして花に入て後
真葉より水をさしなり暫くしてよく水を上る事肝要と

水を上させて後仮括りを取べし若又客席に差かゝりて養生に餘ハざる時ハ暫く日に干して志をびさせて組べし

又切とりて根を煮湯にさし入直に取出して其侭捨おくこと半時ばかりにして押べし至極つよひ姿のもの也

藜蘆七枚組の圖

○藜蘆ハ葉三枚に實を包しらふ時ハ体の葉を霜かこひとして用の葉を風囲ひとなし留の葉則ち實囲ひ又五枚ぐミの時ハ体の漆の葉を霜かこひとし用の漆葉を風囲とし留葉ハやはり實かこひなり、藜蘆の出生を弁ずれバ二枚陰陽と組て出其中より又二枚組て出る則ち此四枚東西南北を指ていづる其中より又三枚いづる都合七枚是おもとの一躰なり故に八枚目の葉いづれバ始に出たる葉に虫がつくか或ハ腐るかするものゆへ是によつて七枚を一株として組べし七枚ぐミの時八五枚組の中へ三枚さし葉をさすべし前に記したる圖の如し又九枚組の時ハ体の二の漆を霜かこひとし用の漆葉を風囲とし留ハ例の實囲なり實ハ組葉の外へ差入べしその余の數

葉も是に准じて葉組をすべし

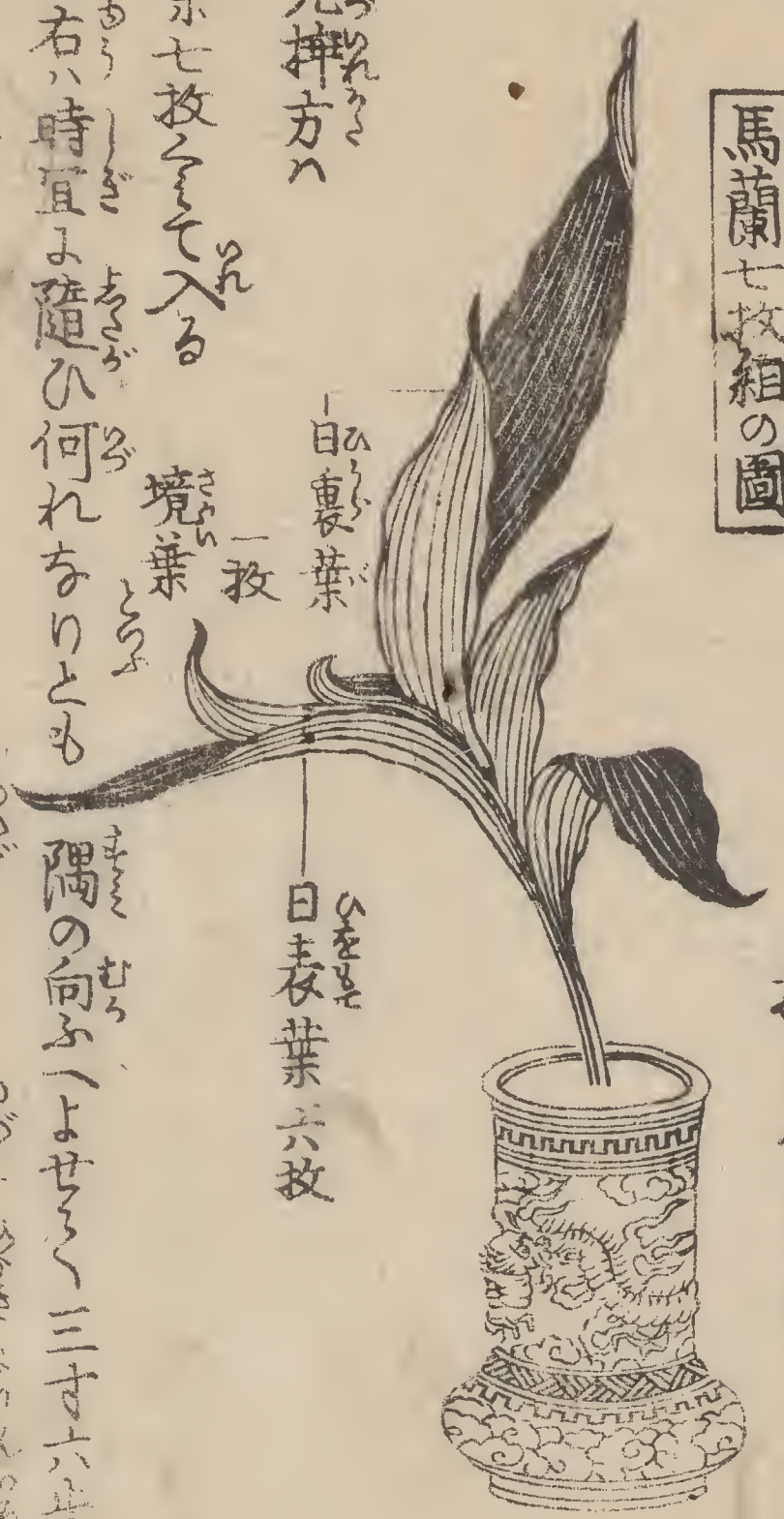
○蓊奈蘆七五三組上の図

挿方ハ体一枚 体の添一枚
用一枚用の添一枚
都合四枚組て
夫より中へ長短よ
三枚さし葉をすべし
小株ハ三才よ組て二枚指葉を
しくて五枚ゟ上大株の横へ
合ほべし 小株よ霜囲の葉なる故体用の腹へ実を入るへ

則ち実の居どころハ小株の葉の下なり故よ実の上へかゝりし
葉ハ霜ぞひなり然れバ用よも体よも霜囲の葉なるべし 偖
実の前へ幅廣き拵葉をつかひ此左右へ一枚づゝ添て都合三
枚よして根元を巻べし 此三枚ハ土葉よて実かくひとゆふ則ち
都合組上七五三の数なり

○馬蘭を伐とるハ朝夕の時節をよしとス
図の如く葉を
巻て紙捻よて結び
水よ害入べし至極つかひ安きものゝ又暑中などハ井戸ゝ下
置ときハ殊の外強くなるものゝ艶をよくなしよハ酒ゝ根を

漬をくべし又葉ハ酒をうち一夜根を水に入翌日此酒をよく
ふき取りて生るもよし光をよく出たものなり
○馬蘭ハ地中よりハ三枚囲りて其中の葉地上へ成長するへ一枚
づゝ出生する葉なし又花ハ土肌に咲ものにして頃ハ三月中旬
より四月上旬まで咲ものゝ葉組ハ七枚の時ハ日表六枚日裏一
枚つかふ是陽分の六にして陰分の一を入るゝ此葉陽ハ陰に替を
もつて境葉といふ又五枚生る時ハまづ日表葉三枚陽を定て
四枚目ハ通つる一葉にて境葉一枚をつかふべし夫より留の葉
又日表葉を入べし右葉三枚ハ一に生じ三で終る一枚是起終
なり又三に終て一に生ずる又三と成て一に納る是皆三一の通と云

馬蘭の花を水中よりつかふ事ハ陰中の陽なり廣口馬盥の類に
挿べし右花ハ至つて軸短き物なれバ細き竹にて軸をさしてく
挿されバ用ひべし

馬蘭七枚組の圖

日裏葉 一枚
境葉
日表葉 六枚

先挿方ハ
葉七枚そろへて入る
左右ハ時宜に随ひ何れなりとも
隅の向ふへよせて三寸六分の
何け前へ三枚いれる七枚と三枚の間の水中に替と用と三輪入べし

但し尖葉ハ花に添て二本いれ又三枚の根本より柴し
前の方へよせて半開の花に尖葉をそへて水中より留ハ
砂を用ひ天地人の飾石をつかひ石にて水に景色をとる
べし此時ハ天一地六の割を以て一寸六歩のかけて石を置べし
尤花器の大小に准じ時の宜に随ふ
○廣口ハ角。盤ハ圓く馬盥ハすこし飯櫃がさく
此外何にても廣きものを用ひてよし
又茶席などにて手がるく入るにハ薄廣口などよし
○手軽くいけるにハ葉三まいをとがり葉二本水中に蓊と
開と花二輪つかふべし花葉とも曲ある直よろしからバ
又長き尖葉を三本長短に組て水より上へ二三寸出して
挿此前へ一寸八歩離れて水上へ蓊と開と二輪に尖葉を添て
風情よくいるべし尤天地人の石をつかふべく
但し是ホの手軽く入るハ小座敷に直し又大座敷にハ
七枚九枚の大葉を入るも葉を隻と見せるが馳走といふ
べし九枚の時ハ用三枚躰三枚留三枚と心得もちゆ
尚又すべて根の細きものハ水際のしまり高さハ宜からバ
○花ハ三月中旬より四月上旬まで此間ハ馬蘭に余の花
の會釈を決してすべからバ此節を以て馬蘭の旬とバ
葉の形至つて何しき時ハ目立ざる様扶しハ斷繕ひ用ひても
苦しからバ節やしなひの害にハならざるものぞ

○夏より秋の中旬迄ハ巻かゝえたる葉をつらぬ事
是ハ蜘の糸に引かゝりて全く伸ず巻し
かゝえたる形容を生るゝ
巻様ハ火箸をぬくめ
葉さきを挾みてくきまでくど
巻て捨置れバ程よく巻てよし
○冬ハ枯葉を交て生るも有り
是ハよき枯れどもよき葉をむしりて線香
などにて火をつけむしりたる小口を
焼べし然れバ小口実に枯たる如くなりて風情よし

○葉數おほき時ハ巻葉を入る事有り二三月ハ左旋にまき
三月下旬より四月に至りてハ右旋左旋と交てつらぬく又五
月より後おくく出る葉ハ都て左旋と心得べし但し馬
蘭に限らず葉物ハいづれも斯の如し　但しこれハ左に図せるくもの巻葉にハ有らず
○蘭ハ往昔唐山より渡し時ハ花一輪にて有しといへり此地
にてハ変化して花數おほく出生する故今ハ香気も薄
成しとぞ蘭の出生ハ一條に葉三枚有るひハ四枚又性よき時ハ
五六枚も出生するもの也性よき時ハ葉多しと心得べし
先入方ハ用に皮肉骨の備ありしを選ひ其上に一のそへを
用の一葉の上にそ二の添ハ直にのべて用の前へつらね用の

葉を二の添にそへて挟く
出生を向にし是鳳眼を
備ふなり鳳眼といふハ
二ハ上の圓く向りて下ハ
圓なく半月の
形をなすものを云

夫より用の花を遣ひ
其後ハ体の葉をつかふ此葉ハ篠葉ごとく性よく出生せしを

○鳳眼
如圖といふ

○花器ハ土器か
金具の類ひ
よし

用の次ハ二の添をつかふ二の添ハ体の葉の後の挑になる後へさぐ
なる葉をそへて鳳眼を備ふその背へ花一輪 よくく見隠
に入る是ハまし渡りし時の例をひきて一輪を何くもよし愛
きちるなり留の葉ハ鳳眼なくしても三枚ハ左性よき葉をば
長短につかふべし葉すべて天地人の三才を取なり花器ハ
土器か金具のたぐひよし

○女郎花の生方ハはじめに大根葉をいれ夫より花を挿べし若
大根葉なき時ハ芥込にして三段五段と挿べし又大ざん
葉なしと入るとも可り大根葉といふハ女郎花の親葉はし
て其形大根の葉に似たる故かくハ号出生を正しく

さる時ハ親葉をつかふと心得べし

○枇杷の出生ハ葉大小ありて陰陽と拝ミ合さる形よりいづるもの也若大小なく同様ニ出さる枝あらバ一枝の葉ハ虫食ニなすべし則ち陰陽備りて活物となるべく大ハ大小ハ小と斤よりて調達ニ物の出たるハ是定め極る所よりて動かズ是死物なり足ざるハ動く理ありて活物と心得べし萬足おと有れバ足ざる所又ここに發

不足あれバ足ると出る一躰よりして一理なり

○枇杷ハ其花さへも悪く天を守らざる花多く有ものへ是ハ花を鋏ミおとし勝手よき所へ細き竹剣をさして行義よく葉の中へ

○大の葉ハ陽なり

○小の葉ハ陰なり
陰陽むかふ形よりて葉をさらし挿べし

△咲ぬべし△

枇杷の花ハ持つよく三四日も凋む事なし尤是ハ花の出生にて破りて

賤しき業とハいへども詠めに進むの理あるを以て此事を用る
なり冬の花なる故に籠ハ用ひべからず

○玉川の棣棠挿方

○玉川の山吹ハ葺込ともいひ又數入ともいふ竪鱗横鱗と入べし
竪横の鱗ハ陰陽にして則ち和合なり玉川山吹とハ水の流
に随ふ如くに生て留方ハ蛇篭にて留るへ
蛇篭の寸法ハ長さ五寸六寸七寸八寸九寸夫より一尺一尺二寸迄
遣ふへ
廻
三寸六分

其中へ砂石を詰て風流に飾るべし竪鱗を体として横の
鱗を用として右三株の分れる間一寸八分と定むべし
但し花澤山あれバ三寸六分の
あけて生べし花ハ躰用と二段に
しるく
水の陰と和合ある由へ
留の花を入る事を
禁ズ体ハ渦真にて
右旋左旋と扱ふべし
尤棣棠ハ
置花にハ移り

雜なきものなれども蛇篭を愛して置花にも用ゆ
又苅込にハ澤山に入べし二株の分ちなくとも苦しからず花技
ともに半数にして躰用と挿べし
都て草木ともに竪一身の勢ひ有り是自然の性なり
故に技葉澤山につらぬれば六かしく捩り曲りたる性ハ天地
和合の性にあらず是を狂ふといふ又難枝難花をさつく
禁忌を守り明にすべし
○燕子花の挿方ハ先三ツ葉を用の所に入て夫より花を入
又躰の冠葉一枚を入る次に後へ添葉一枚いれて其下へ
蕾を一本いれ而して留に水吸葉を後へ生べし夫より
露受の葉を挿べし花二輪葉七枚の挿方
○燕子花葉の名目　圖の如し

○陰陽の葉の圖

○陽の葉ハ
左旋にしてかさし
長く上へ組べし

是ハ則ち地にして陰なり

是則ち天にして陽なり

○陰の葉ハ右旋にして
短く下へ組なり

○天地陰陽の中ニ萬物生立理にして一枚の葉を生ス

是を芽吹葉といふ

是則ち天地人の三才なり

○一輪挿の圖

花一本 葉三枚

○五枚組の圖

三枚葉を後へ入る

花二本

○燕子花の
風情ハ十分葉を以て作るものなれバ葉先ひらき乱るる
葉ハ悪し 強き葉の
直なるを
よしとせん

○尤いづれも
生れの侭にてハ
専
よく締よき葉ハ些し

故に一枚でも放し恰好よき様長短を揃へ三枚にても三枚にても組よきをよせて元の如く組合すべし

○燕子花の葉組するにハ口中の唾をつけ葉をつける時ハ放れざるもの也早咲の杜若ハ一枚づゝ切てなし水に挿べく葉の凋れる古実なし

○花溜に養ふ間も始終真直に立て活置べし斜へ横へ置時ハ花首曲り易く花も背きて咲なりよく揃へならべて細竹槿の枝などの直なるに引さき紙にて打藁にて緩く結つけ水深く活おくべし若曲りて面白き古実も有ども多ハ悪く癖づくものなり葉も一旦水上しられば横にねさせて

○九枚花二輪の圖

○十三枚花三輪の圖

○十五枚花二輪の圖

折く露を打べし

○古人云
花ハ生べし葉ハ生ざれと
都て草木ハよらバ
花よりも
葉をつかふと
専要なり別て
草物ハ花より葉をつかふを重とすべし

一燕子花七枚の挿方ハ初ニ三枚を用ゆれ夫より花を入其後へ花より少し高く冠葉を入る但し花葉とも用の葉の分ハ少しみぢかくすべし
夫より躰の花を挿る
次ニ添葉を入る

又花一本
其下ニ葉一枚
又花一本其次ニ葉二枚夫より留の花一本入れ次ニ水吸葉露受葉等を入る都合花五本葉十一枚也
○花五本 葉十一枚の方

此余入方種々有りといへども一二を出して略之余ハ是に准じて勘考すべし

○大小株分の図

陸の草花を生けて入るを株分といふ本物なれバ谷間とよふべし
都て花の高さ十歩一を以て株の間の幅と心得べし

釼葉の圖

○八ツ橋燕子花挿方

○八ツ橋燕子花といふハ真中ニ大河ありて其両脇ニ小川四條づゝありて蜘手の如く八もじに流る是ニ橋をかくる故ニ八ツ橋といふ所謂参列八橋の景色を象りて僅の廣口へ燕子花を愛し挿るを以て八橋の生方といふ先廣口の真中へ横ニ流れのけしきを取なり是ハ黒白の石を以て陸と川とをしらへ黒き石を地形とし白き石を流とに生方ハ先大株　葉十五枚　花五本　始ニ定法の居取へ三枚葉を用ゆつひ是ニ満開一輪をつけて入其後へ花より少し高く添葉を二枚いれ夫より花一輪葉の中より前へ出して入次ニ後へ一二三四の添と冠葉と都合五枚いれ其下満開一輪少し長く半開一輪少し短くして入べし又此後へ葉二枚いれ是ニ属て蕾一輪

葉三枚留ニ入るなり花形ハ竪鱗の格ニよろしく体用留と三才の花を入べし

八橋の燕子花廣口之挿方大概

○此邊ニ九枚　花二リン　横鱗

此下ニ二枚づゝ組る葉十四株入べし

○此辺　葉九枚　花二リン　横鱗

○此辺　五枚花二輪　竪鱗

○此辺へ　小葉五枚花一リン　竪鱗

是より八寸へだてゝ三枚の魚道を入る

○此辺　七枚花二リン　横鱗　廣口の手前へ出ル

○此辺　五枚　花半開一リン　勝の葉二枚　水をくゞりて廣口の半へ出る

○此所へ　大株　十五枚　花五輪

竪鱗　三才の花を

此辺へ　○若吹葉の株をとゞけ　水中ニ十四株入べし

此辺へ　○曲ある葉あり　七枚横鱗

同じく　○水中へ二枚づゝ組て十三株入べし

○大株の後の方右よりて水潜の葉五枚花ハ半開一輪を用ゆべし右の内三枚ハ用の葉にて水を潜りて廣口の半へ出る花も水を潜りて三枚の上へ出る躰の葉ハ長く花に添て挿水吸葉ハすこし短く遣ふべし

○廣口の右の手前へ九枚と花二輪入る花形ハ横鱗にて先始に三枚組て用に入満開の花をいれ次に躰の葉一枚一二の添と都合三枚入躰の添葉の下へ莟一輪いれ其後へ留の葉一枚一二の添と葉と長短を取て三枚入る也尤この葉ハ留にして開ある故に体用に准じて形よく短く遣ふべし

○廣口の向ふの縁へ五枚と九枚と二株入べし但し五枚ハ竪鱗の格の花にして満開莟の二輪を遣ふべし九枚の方ハ横鱗の格にいれ花二輪もちひ其下へ二枚づゝ組たる葉を十四株入べし

○大株の右の方へ七枚に満開莟の二輪を添て廣口の中より外へ向て出し其次へ小葉五枚に半開の花一輪竪鱗にて入其根の本とりて八歩のむろり明て三枚魚道を入べし

○廣口の半より手前へよせ左の方に曲ある葉七枚是ハ葉をこのり横鱗の格にして廣口の左へ出し此七枚の葉の下へ芽吹葉なを二枚づゝ組て水中に十三株入べし

○廣口の手前左の隅の方へ芽吹葉株を上げて水中へ十四株挿べし留ハ砍にして水中に八橋の景色を画く如く蒔べし

抑此挿方ハ虚実の生方ましらく全く本性ニ違ふ所もおほく有といへども世人の詠めニ進むるを以て花形を飾るつくひ方なり是ハ所謂佛家の方便といふが如し

○花菖蒲ハ前の葉五枚ましらく中葉を高くし花ハ葉より長く遣ふものなり

○渓蓀の取あつかひも花菖蒲同様なり但し菖蒲あやめハ陸草と心得べし

○水仙の葉組方の仕様

○水仙ハ生ぐせて葉性つよく只一よれなるを撰みて生べし花縮で伸ざるをよしとす

一よれの圖

二よれまたよれたるを次とす

あれども葉性つよけれバ一よれにためなほすものなり

如圖よれなきハ葉性の弱きハ直りがたし

○右葉の揃へやうハ先一本取あげ白根のところを静にもみて又ハ捻て其葉根をやはらげ

花さき前にぬきて夫より葉をだんだんに抜べし元性ハ二枚づゝ重り出る者也へ葉の癖をなをし重ねて用ゆべし
さて後へ花留の用ひがたき花器又ハ曲ある体をつかひ度節ハ用ゆる也へ破れざる様にのけおくべし但したけ高く入ざる時ハ始に白根と共に伐もつべし

○一枚づゝぬきて抜ス図

○此抜をそろへざる葉を一枚づゝ直すべし但し外の長き葉ハ日表の凹なる所又内の短き葉ハ日裏の凸の所を食指中指巨指の三指にて板の上に押ひろく本より末の方へ葉の剛弱に随ひ五七遍もしごき直し長短を程よくして重ぬべし

○くせをなをし重ねる図

○しごきて悪き癖を直す図
但しあまりに強くしごきすぎれば葉の色あしく成て賤しくつやの落さる様にすべし

○口中のつばにてよく引つくれば

○程よく重ねて後もとをさし込む図

○もと皮さしこみたる図

○葉のもとをそろへさしこめばよくくみあふ

もと皮さしこみたる時ハ外の長き葉より一枚づゝさしこむもよし

○花を立るに咲たる蕾の花を取よせて其蕾に鞘をつけて
咲せバ立に勢ひよく咲なり
○三本組上生たる図
○時節ハ九月下旬より
正月までに生べし
○数本入る時ハ葉の形種々よつひろに同じ形容の重なら
ざる様風流に生べし
○組上にこしらへおき水に
入をき後
取出し入
べし
○葉組恰好略図
○何れ二枚づゝ重ねるれざる
様々組ていろく恰好を
こしらへる
べし
○二枚の長短も何まりに
くひ違ひあるハ
宜しきなれバ
此の如く
葉に
模
様を
付るを
曲葉と
云り
玄曲葉ハおもしろげなれども兎角に
賤し
好べからず
捩べきこと
何らべ

○藤の取つくひ様

○藤ハ掛置ともに挿る時ハ食出しの半開を賞美すべし會釈ハ藤と同性のものハ宜しからず早咲の美人草なるひハ金銭花の類ひよし芍薬など用ゆべからず

○藤を廣口馬盥の類に入る時ハ始に藤をのれ其本に天の石をつかひ水辺に早咲の水草を會釈べし又陸草なれバ一八馬藺草の類よし陸物の時ハ飾石を用ひず株分にして入べし但馬藺草と藤との間ハ谷間を取べし

馬りん草

○一八

○藤の三種生方

○藤杜若河骨の三種を一器に挿るなり始に心中に谷の流水草の氣色山に藤の咲る形容を備へ此藤の流れに移る所を挿べし又池のけしきに心得其池の浅きところを水草生じ藤ハ陸に有て池水に移る氣色を挿べし藤と水と應ぜる所に随つて燕子花河骨を遣ふ也河骨ハ魚道を見けるに三枚五枚と挿る時ハ三才に入べし又角葉の曲れる所を入るも廣口馬盥の類に入るゝよし花満開ハ見苦敷なれども好ましく生るときなられ蕾と若葉を愛しく挿るなり但し英下りにて英の本に二輪色を見せる所を

五房七房九房とつかふべし。玄技ハ左旋右旋と交て用ゆ又花満開なる葉も多き時ハ花ハ大小二房大葉を透して芽吹の葉をつかふべし夫より魚道四寸八分を明て河骨を挿又次ニ三寸六分の所けて杜若を挿べし則ち天地人の飾石をつかふなり先定法の前へ天の石を置その後へ藤を入れ藤の根本へ名石の小石を小高く盛て留べし水辺の前へ杜若河骨といれ陸物ハ水草を會釋て一瓶の花とするべし

右此圖ハ大葉の恰好よしくく強からず手本とまづ是ハ銘く鍛練の工夫をもつて水陸の氣色を備へ其出生のさも有べきと思ふさるよ挿るこそ本意といふべし

○藤ハ原より出生左旋のものなり然れども上座ニ床ニ生る時ハ一本ハ右旋ましろく生べし又下座床の時ハ出生の儘左旋なりに入べし都て水草ハ枝なきものと心得べし枝あれバ陸物なり其内いちはつ渓蓀菖蒲の類ハ陸草く

○體の末ハ皮なり用ハ肉なり水際ハ骨なり故ニ根の締穴のなきき揃ふ心得べし

○萩一色一莖込の事

○萩を澤山ニ入る時ハ用ニ四五本体ニ四五本留ハ切葉ニしらく枝かずを多くつかふべし尤見切ハ許せども見切く如様ニきるべし留の葉ハ体の座といひて此花

ニハ臥猪の景色を挿る心得べし猪の座てハ別して曲をつかふべし但し閑静ニ取扱ふ

花形ハ三才ニよろく

○養ひハ行のやしなひハニしく

時候ニ應じて山椒を強くきるべし又二篇ニ著る如く時ハ掛花て生べし

湯にても茶にても両様用ひて可なり

○夏の萩ハ澤山に挿べからず尤も養ひハ真の養ひと心得べし

○紫苑ハ花なき時にても生べし會釈を用ゆべし

○桔梗ハ芥込に入る時ハ三段より九段までも功者に任せ生べし
三段といふハ三枝の事なり五段七段九段といふも皆枝かずの事
と心得べし　則花形の詞にいふ七枝つかふを七段の花形と
いふ　但し桔梗ハ真の養にして取扱ふべし

○牡丹挿方黒木の事

○牡丹ハ陽中の陰の花にして草花の王也故に牡丹を床に
挿る時ハ其間に他の花を入る事を禁ず但し次間に下て

余の花を生る事ハ苦しからず花器ハ廣口又ハずんど切
までも風流なるハ可なり入方ハまづ用の枝に性のよき
葉を澤山につかふべし　○是を獅子隠といふ　此葉の上に満開の
花をつかひ夫より躰の花を入るゝ是ハ半開を用ゆ花の
際につきたる葉ハ下葉にすべし尤もさがり葉ハ昇る勢ひ
ありて右旋なり登葉ハ左旋にすべし　是則ち陰陽和
合の葉と心得べし　又躰の後へ花を見こしに出す葉
をつかふ　是を花せしと云　体用と入て後へ黒木を一本つかふべし
大抵又その木に准じて花より二寸或ハ四五寸むかう高く
黒木を一本入べし　都合二本に夫より留に苔をつかふ尤も

留のつかひ方ハ用の花より些し下て腰を高くし性のよき葉を澤山につかふべし

則ち是を亂がくしの葉といふ

此見越の葉を花つゝみの葉といふ

此用の技の葉を獅子隠れの葉といふ

又牡丹の黒木にハ風流の技ぶりいずれにもなく心に叶はぬこと多し依て南天の木を仮技につかふなり色のつけやうハ灰墨に弁柄を和て

右南天の木を塗べし尤この二色を合せて解には飯の煮たぶれたる所の湯を汲おきて是にて練ぬればよく色を保つなり但し技をとくと撓て後色をつくべし葉の組方ハ上下りにして陰陽を定め花ハ天地人の三才を備ふべし

○冬牡丹ハ花の軸短くして葉の茎つまりて挿ざし入方ハ先冷水にて一日一夜とくと養ひ又南天の若木の性よき所をとくと養ひ黒木につかふべし花ハ黒木に錐もじて花をつける是冬牡丹の傳なり葉ハ花に准じて挿へし花際まで水に浸し三時半ばかり養ひおきて後挿べし開と蕾と二輪取たつる時ハ陰陽の花半開ハ

天地和合の花と心得定法とす牡丹ハ籠の花器によく
うつる物なれども冬ハ籃を禁ずる故に余器を用べし
右余花を會釈とを禁ず但し臺目にも生るを禁ず
牡丹ハ草花の王なれバ床の間の外ハ一切生べからず

○芍薬も余花を會釈べからず先用の花ハ上下々
葉の間に含まして葉をつかひ
満開を
挿べし
夫より幹に半開を
高くいれ留につがふを遣ふ廣に馬盥ホに挿分など

にいるゝ挿るゝ木物のはしらひに木と草の差別をして用
ゆる時ハ苦しからず

○牡丹芍薬ともに伐ところに鉄銅るいを禁ス真鍮の鋏小
刀ホを用ゆべし花器にも鉄ちろりの類を禁ずべし

○蓮の五種挿の支

○蓮河骨燕子花沢瀉萍ホの五種を一瓶に挿るゝ
花器ハ廣口馬盥の類をよしとす大なる花器に入てよろし
右花器の真中を深きとし縁の廻りを浅瀬とすべし飾
石に作意をもつて景色備ふべし但し飾石も花器
の真中に置べからず花の生ところ萍ハ浅瀬にいれて其服へ

花澤瀉をつかふ又杜若ハ浅瀬ニ入べし蓮ハ如し深きへ入
河骨ハ葭の前へ入る深きへいれる花葉ハ短くし浅瀬へいれる
花葉ハ長くもるが自然なり先蓮ハ廣口の居所へいれ
則三才の花と定め躰ニハ天を移せし用の鏡葉をつかひ
用ニハ半開をつかひ留ニハ巻葉をつかふ開花を体用の間へ入
蕾ハ体留の間へ挿む蕾ハ開より低く入べし

○次ニ一寸八分
魚道をつけて
細葉の杜若を入
花ハ半開なり一輪用ゆべし

三枚葉をつかひ後へ半開を入て其後へ葉を長短に組て入る
○客位なれバ右ニ河骨を杜若より出し▲
則ち横鱗く
先曲ある半開の巻葉を
▲低く入るべし
躰ニハ其ハ後へ半開の花を
一輪入て留ハ角葉を
つかふ
○葭の根本へ花澤瀉を
いける
○左の方の向ふへ葭
三本竪ろこの
格よくて
七枚五枚九枚と
入べし
○魚道一寸二分つけて
花ハ蕾と
開を
まぜて
用ゆべし
○留へ
角葉を
つかふべし
○用ニハ小き
開葉をつかふ

右五種ともに花形を小縮ニいれ

水際を正しくすべし則ち蓮ハ大葉をつらひ花形乱れざる様なる挿を肝要とし体の花を長くし用の葉みじかく鱗の格をとるべし　留方ハ砂すく三才の飾をつらふ飛石ハ天一地六の割を以て程よく水中なるけしきを備ふべし

○尚此余種々の挿方故実濫觴の説話且三四の編に洩たる故実を委しく著はし續て發版に及ぶべし　必らず閲して花道に有益なることを知たまへと云

生花早満奈飛四編畢

攝港　鷄鳴舎暁鐘成編輯

生花早學　自初篇至五篇　成刻

完運堂世傳受
福相なる傳受
孝行なる傳受
金をもふける傳受

弘化二乙巳歳九月發行

書房　大阪心齋橋通南久宝寺町北へ入
伊丹屋善兵衛梓